

2022年8月21日 聖餐式説教

この八月、私達はルカによる福音書から、天国に入れる者となるためには、すなわち御心にかなう者となるとは、どういう生き方をすることなのかを学んでおります。本日の箇所は、私達が陥りやすい、主なる神に熱心に仕えるつもりでいて逆の方に行ってしまうことについて学びます。

狭い門から入りなさい、広く安易な道には正しい答えがない、ということ。楽をして苦勞を避けて成功することはないということです。包丁など刃物を作っておられる方のお話しを伺いますと、よく切れるようにするには何度もたたいて火を入れて、鍛え上げなければならないのだそうです。このような作業を通らずに作られた刃物は、切れないばかりか、持ちも悪いのだそうです。スポーツの世界でも、優秀な成績を上げたのは才能のある人よりも、努力を重ねた人であるとよく言われ、報道されているのは皆様もよくご承知の通りです。

私達は進んで苦勞を担おうとはなかなか思えません。なるべく楽に、疲れることを避けて行きたい、今負っているものだけでたくさんなのだから。そういうふうに思います。これは旧約の時代から信仰の戦いが続いている、ギリシャの人間主義的な考えによるものであります。先週私達は主御自身が私達を訓練なさることを学びましたが、主はなぜ私達を訓練なさるのでしょう。それは私達が天国に招かれている者でありながら、まだ天国にはいるにふさわしくないからであり、私達が天国に入るにふさわしい者となることを主は強く望んでおられるからでありました。それを考えますと、私達がなるべく楽に、苦勞を避けてという生き方はどうなのでしょう。狭い門から入りなさい。この御言葉の語りかけに私達はどう答えていかなければならないかを考えさせられます。信仰生活は、この世的な合理主義や人間主義と戦わねばならないことが意外に多いのを、改めて思わされます。

後半の部分では、天国に入れるかはいれないかを決める場面、教会ではこれを最後の審判または審きと呼んでおりますが、ここでは天国にはいることの出来ない恐ろしさよりも、主なる神が喜ばれる生き方がよく現わされております。

ここに主なる神に懸命に申し開きをしている人がいます。この人は主なる神に従う生活をしているつもりでした。最も主なる神を愛しているつもりでした。他の人よりも自分は優れた人間であるという自負もありました。しかし主なる神はこの人が天国にはいるのをお許しになりませんでした。なぜならばこの人は、自分にばかり目が行き、心から主なる神がいなくなっていたからです。私達の社会では、夫々のところで、夫々の人が役割を担って動いています。もしその中のある人が、皆自分のことをわかっていない、いつも苦勞するのは自分だけだ、他の人は自分がいなければ困るのをわかっていない、もっと謙遜にあってほしい、そしてもっと自分の働きに感謝してほしい。そう思ってあくせく働いている人がいたらどうでしょうか。私達は心を入れ替えてその人に感謝するでしょうか。まずそうではありません。あの人は自分だけが苦勞していると思っている。自分の苦勞にしか目がいていない。人の前でだけ働いて嫌な人だ。そう思われてしまうことでしょう。主なる神の前に謙遜であること、これが重要であるのが示されております。

先ほどの主なる神に天国にいれてもらえなかった人も、実はこういう人達だったのです。すなわち主なる神のために働くとき、ただ負担な気持ちだけで働くならば、自分だけが苦勞していると思うならば、それは正しい姿ではなく、主なる神が悲しまれる姿なのだと云っているのです。主なる神は最後の審きの場面を持ち出して、私達に今の生き方を振り返ってみなさいと言っているのです。主なる神に仕えるとは、自分が第一にあってはならず、喜びをもってなしていなければ主なる神の御心にはかなわないのです。

この教えは、私たちににとって大変耳が痛いことではないかと思えます。しかしこの耳が痛いのも大切なことでもあります。私達がもしこうした教えを聞いても心に響かない、何とも思わなくなってしまうたら私達の心に主なる神が入る余裕はなくなってしまうます。主はこうした反省の時を通して私達を振り返らせ、御心にかなうものをなるように訓練なさるのです。それが狭い門からはいることであり、主なる神のみ心にかなう者にされていくということなのです。私達夫々がこの御言葉を受け止めて、主ご自身による訓練によって育てられ、天国にはいるにふさわしいものとされますよう、導かれますよう、導かれますようと思えます。